

南方熊楠の国内雑誌への投稿記事

—— 国内での初投稿をめぐる ——

安田 忠典^{*1}

On the First Japanese Contribution by Minakata Kumagusu to a Domestic Magazine in Japan

Tadanori Yasuda^{*1}

It has been said that Minakata Kumagusu, who had stayed abroad until 1900 and had always written academic papers in English, made his first Japanese contribution to a domestic magazine in Japan, *Toyo Gakugei Zasshi*, vol.21 no.274 in 1904. However, the author discovered his earlier contribution to the same magazine, vol.21 no.271. It is a small article of botanical question about so called Tayashida fern, with the answer from the editor after it. This paper introduces the full text of the first published Japanese article of Kumagusu as long as now confirmed, analyzing its contents and the background.

概要

1900（明治33）年に外遊から帰国した南方は、和歌山の実家でもてあまされ、翌1901（明治34）年、家業であった南方酒造勝浦支店へ向かう。それより南方は足掛け4年間にわたって、那智山や勝浦周辺で、植物採集と海外への論文投稿、そして真言宗の高僧土宜法龍との文通などに専念した。いわゆる那智隠栖期といわれるこの時期に、南方は国内の学術雑誌にも投稿を開始している¹⁾。

これまで、この那智隠栖期に南方が最初に国内雑誌へ投稿した文章は、1904（明治37）年、『東洋学芸雑誌』21巻274号に掲載された「ホトギスについて」「本邦産淡水生紅藻について」「梅について」の3本の短い報告であるとされていた²⁾。

しかしながら、『日記』の記述などから、それよりさらに以前に同誌に寄稿していたことは関係者の間では知られていた。すなわち『日記』の、1904（明治37）年5月14日付の頁にある「客月の東洋学芸雑誌、予と伊藤篤太郎氏の植物標品問答出、を受く。」という記述がそれに当たる³⁾。

今回、南方熊楠顕彰館に所蔵されている南方の蔵書から、同誌の該当部分（21巻271号222頁）を確認したので、投稿をめぐる経緯とあわせて紹介したい。

書誌

南方の投稿は、同誌末尾の「応問」というコーナーに掲載されている。このコーナーは、南方が在英時代に頻繁に投稿していた『ネイチャー』の読者投稿欄や、雑誌自体が読者の投稿による応答

*1 関西大学人間健康学部

を中心に構成されていた『ノーツ&クエリーズ』とよく似た性質で、読者からの質問に対して専門家が回答するという形式をとっている。

そもそも、在英時代に前述の2誌を主な寄稿先としていた南方は、編集部からの依頼原稿でも、学会の査読を受けて掲載される学術論文でもなく、ほぼすべての文章を一読者からの投稿というかたちで寄せているのである。その意味では、帰国後の初投稿、そしてその後しばらくの間の寄稿先が、同じようなコーナーを持っていた『東洋学芸雑誌』であったのは所以なきことではあるまい。

しかも、1881（明治14）年創刊の『東洋学芸雑誌』は、当初から「英国誌 *Nature* が目標」であったという、わが国ではごく初期のいわゆる総合科学雑誌であったり。在英時代、その『ネイチャー』に投稿していた南方にとっては、当時国内においてはほぼ唯一の総合科学雑誌であった『東洋学芸雑誌』こそ、もっとも慣れ親しんだ形式で自説を発表できるメディアであったに違いない。

実際、今回紹介する初投稿から、国内で「南方熊楠」の名が知れ渡るひとつの契機となった神社合祀反対運動に関わるまでの約6年の間、南方の主な投稿先は『東洋学芸雑誌』であった。

初投稿の内容

さて、それでは、記念すべき南方の国内最初の投稿の内容を見てみよう。以下に全文を掲載する。ただし、漢字はすべて現代表記に、句読点は適宜補足している。

拝啓貴誌二百六十六号に伊藤博士のヒマラヤ植物と日本植物の類似に就いてと申す一篇あり。別封の羊歯標本は当郡に多き者にして方言「タヤシダ」多屋氏の山林にて創見せし由。座右のノッカー、及ペーカー氏シノプシス・フィリカム千八百六十八年板の本に拠れば *Adiantum lunulatum*, *Burm.* にて香港、交趾支那、ヒマラヤ山等に産すとあり。別に支那に産することは見えぬ。伊藤博士研究の一材料ともならんか且併せて今日は支那にも既に産地見出したる者[マ]なりや否やを問ふ。

又別封菊科植物一つは飯沼翁草木図説刊本卷十六（三十七）ワタナの図説に恰当の様被存候。これは学名を何と申す者[マ]なりや。

和歌山県南方熊楠

答

羊歯は *Polystichum Maximowiczii* *Diels.* 和名フジシダと称しペーカー氏「シノプシス・フェリクム」五百四十四頁の *Polypodium Maximowiczii* *Bak.* に之あり。其の産地は本邦中部南部の山にのみ知らるゝものなり。

菊科植物は、ヤマザワウギク或はイヅハ、コ、漢名杓児菜と称し、学名 *Coniza japonica* *Less.* 九州四国伊豆七島などに産す。

ごく短い応答であるが、おそらく回答者は伊藤その人であり、南方による羊歯の種名の推定が誤りであることを、別の種として同定することで明らかにしている。このように、南方はあくまでもアマチュアの投稿というかたちで、国内の学界に、遅ればせながらデビューしたのであった。

寄稿の経緯

では、この文章が投稿された経緯を見ておこう。不本意な帰国からしばらくは放蕩の日々を過ごした南方であるが、那智に腰を落ち着けた1903（明治36）年から、本格的に、在英時代の寄稿先であった『ネイチャー』と『ノーツ&クエリズ』への投稿を再開する。

しかしながら、これらの投稿は、在英時代に、当時としては世界最高の環境であったといっても過言ではない大英博物館の図書館で自在に文献調査ができることを前提として構想されたスケールの大きな研究に基づくものであり、図書館さえない熊野の山中とのギャップはあまりに大きかった。

それでも南方は、在英時代に集めた資料を駆使したいくつかの長文の論考を、いわば総決算として書き上げたのであるが、残念ながらそれらの論文が海外の雑誌に掲載されることはなかった⁵⁾。

南方が『東洋学芸雑誌』に稿を寄せたのは、まさにその総決算の戦いが手詰まりとなってきた頃のことである。つまり、自身が「一世一代」とまで称した「燕石考」や、長文の「日本人太古食人肉説」は、1903（明治36）年内にいずれの雑誌にも掲載されないことがほぼ確定していた。そして、幻覚や幻聴に悩まされ「不眠症」となった南方は、南海療病院という、当時僻地には珍しかった近代的な病院へ二度にわたって入院しながらも、藻類や菌類の採集と図譜や標本作製と英国への投稿活動を継続していたが、ついに翌1904（明治37）年の春頃を最後に、英国への投稿は途絶えてしまった。

『日記』で確認できる那智から英国への最後の投稿は、1904（明治37）年4月17日付「ネーチュール、ノーツ・キリスへ状各一」という記述である。おそらくは、この原稿送付をもって英国への投稿は数年間の中断に入ったと思われる。というのは、那智隠栖期に発表した最後の論考が掲載されているのが同年8月発行の『ネイチャー』（No.1817 vol.70）と12月発行の『ノーツ&クエリズ』（10s.ii）であり、『日記』から確かめられる投稿から掲載までの期間から推定しても、やはりこの時期の投稿が4～8カ月後の掲載ということではほぼ辻褄が合う。ちなみに4月17日に発送した原稿は『ネイチャー』に1本と『ノーツ&クエリズ』に4本であったようだが、これらのうち『ネイチャー』に寄せられた *The Earliest Mention of Hydrodictyon* (No.1817 vol.70) のみが掲載されている。

そして、国内初投稿が掲載された『東洋学芸雑誌』271号が手元に届くのが同年5月14日のことである。同誌が月刊であったことを考えると、南方が投稿したのは英国への最後の投稿とほぼ時期を同じくしていた可能性は高い。

執筆中断の真相

このように国内外における南方の執筆活動の時間的な関係を並べてみても、そこに彼のどのような意図が働いていたかを推測することは容易ではない。『日記』や限られた相手との書簡しか資料がない時代のことであり、正確な判断はしようもないが、あえて国内初投稿をめぐる事情を詮索するとすれば、以下のようなストーリーになるであろうか。

那智に籠って盛んに執筆活動をしていた1903（明治36）年の秋頃から、南方は英国の書肆に注文して、頻繁に書籍を取り寄せるようになっていく。これは、前述のように大英博物館を基盤としていた英国時代とは雲泥の差があるにせよ、僻地熊野においても南方が新たな資料を収集し始めていたことの証となる事実であろう。つまり、那智山中での南方は、あらゆる手段を用いて研究を進め

ようとしていたのである。そうした獅子奮迅の努力の一環として、国内雑誌にも投稿先を拡張しようとした。そして、その投稿先として白羽の矢が立ったのが、それまでの英文での投稿と同じスタイルで発表できる『東洋学芸雑誌』であったというのが、真相に近いのではあるまいか。

ただ、そこまでの努力を払って発表を続けた南方ではあるが、1904（明治37）年7月に那智山麓の大坂屋を引き払ってからは、ほぼ完全に執筆活動は停止している。それは、当然といえば当然で、引っ越しのために荷造りをしてしまったうえに、住居も定まらないような不安定な状況で、まともな執筆活動ができるはずはなかったであろう。しかし、それよりもなによりも、その間の事情はこれまでも議論してきてはいるが、精神的、あるいは思想的にある種の限界を自覚せざるを得なかったのではないかと考えられる⁶⁾。

もちろん、執筆活動以外には、藻類を中心とした採集活動や英国のディキンズとの書簡のやりとりなど、那智下山後もしばらく続いてはいる。しかし、それらも1905（明治38）年の『日記』の散漫さを見ればわかるとおり、「アマチュアの植物学者だ」というアイデンティティをかりうじて保持する程度のものであり、2年半に及んだ執筆中断期間の前後との質量の差を考えれば、この時期の南方の荒み方が尋常ではなかったことは容易に理解できるはずである。

この後、南方は1906（明治39）年7月に結婚し、翌1907（明治40）年から執筆活動を再開する。約2年半のブランクであった。そして、その時も、国内における投稿先は『東洋学芸雑誌』であった。

注

- 1) 鶴見和子『南方熊楠—地球志向の比較学』講談社学術文庫、1981
- 2) 『南方熊楠全集』別巻2、1975年、平凡社、p132
- 3) 『南方熊楠日記』2、1987年、八坂書房、p436
- 4) 高田誠二「科学雑誌の戦前と戦後」、『日本物理学会誌』第51巻3号、日本物理学会、1996
- 5) 安田忠典「熊楠の臨界点—那智山での変態心理学研究」『ユリイカ』40巻1号、青土社、pp169-176
- 6) 安田忠典「南方熊楠の那智隠栖期について—『南方熊楠・小畔四郎往復書簡（一）』を中心に」龍谷大学国際社会文化研究所紀要第11号、2010